

夢追の人



(株)丹創社 代表取締役社長 中田泰之さん

「今、大川はインテリア総合都市として、発展することが求められているのではないだろうか。そして、そこに新たなビジネスチャンスがあるとと思うのです。」と語るのは、全国規模で展開する丹創グループの一つ(株)丹創社の社長中田泰之さん。従来からあった(株)丹創社大川工場に加え、4月30日から新たにThe Artisan G(創作ギャラリー、インテリアショップ)、また大川テクニカルセンターをオープンさせた。福岡本社との往来に忙しい日々を送っている。大川市出身である。

The Artisan Gは、実に心地よい空間となっている。創作家具ギャラリーでは、職人達が長年の技術・技法を生かして創る、無垢な木や自然素材のオリジナル家具の展示即売を。インテリアショップは、部屋を彩る雑貨、照明、布、工芸家の手作り作品などの展示即売を行うサロンになっている。The Artisan Gの窓越しには、安らぎを感じさせる、色とりどりの花々があり、訪問者の目を楽しませている。中田さんは「インテリアは室内の家具や備品のことだけでなく、お庭の花も含んでいるのではないだろうか。」という。※Artisanは、職人の意味。

大川テクニカルセンターでは、地域社会への貢献、交流、研究の場を提供する。現在特に、力を入れているのは新しい産業のあり方、新しい大川の街づくりのための情報発信、提案活動だ。産・学・官一体となった魅力あふれる産業都市をデザインし、その面で貢献したいとしている。



中田さんは現状を分析しつつ、新しい大川の必要性をこう説く。「大川は古くから木工の町として栄えてきました。そして、戦後復興時の衣食住を中心としたニーズと、高度成長による追い風が、大川とその周辺に家具・木工関連産業を振興する原因になったと思います。」

しかし、顧客のニーズや生活様式は以前とはずいぶん違ってきます。建設業との関連で言えば、現状では、一部の置き家具を除いては、ほとんどがビルトイン方式で建築付帯工事が行われています。この市場には早くから、大手建材メーカー、商社、住宅メーカーなどが商品開発を行い参入、パイを占有しています。大川は部品下請け工場としてその一部を生産しているにすぎません。そして大川の経済活動が縮小しつつあるかに見えます。いまや新しい大川、産業のあり方が今問われていると思います。」

大川テクニカルセンターでは、その一つの形として、家具という単品の域を越えたトータルコーディネートやエクステリアを含んだ空間を提案をしている。大川の製品を、どのような空間で、どのような生活シーンで使うのか具体的なイメージを提供している。その中でも大川の誇れる文化、つまり職人の持つ技術を生かすことを大切に考えている。

「柳川市の年間観光客は110万と言われています。一方大川で開催される年四回の展示会来場者は年間12,000人にすぎません。そして、陶器の町有田では、人口わずか13,500人のところに年間140万人の観光客と買い物客が集まるのです。有田は伝統技術を文化に変えているのです。大川市にも職人という顔の見える文化が存在しています。全市あげて生きた文化をもっとアピールする環境が必要ではないでしょうか。」

でも、中田さんは大川の明るい展望は、文化・教育・産業と官民一体のパワーが地域の特性と融合してはじめて開けるものだろうと考えている。

「こうして、木工の町から、家具・建具にこだわらないグローバルインテリア都市へと発展できるからです。伝統技術を大切にしながら、住空間、総合インテリアの魅力あふれる都市になれるでしょう。もっとも、商業施設、文化施設、アミューズメント施設もありません。ないことは言うまでもありません。」

そして、こうも付け加えた。「こうした街づくりの中で、新しいビジネスチャンスも生まれてくるのではないのでしょうか。」